

講演会 「東日本大震災と子どもの読書を考える 」

講演「震災後の学校図書館と子ども読書支援の課題」

2013年3月2日(土)
国際子ども図書館ホール

講師：河西由美子氏
(玉川大学通信教育部 教育学部准教授)

はじめに

玉川大学の河西と申します。よろしくお願ひいたします。東日本大震災からそろそろ2年になるのですが、今日は東北の方からも講演会に来ていただいていると伺っています。改めてお見舞いを申し上げます。

先の2名の先生方は組織の中で支援活動をされてきたということですが、私は大学の教員、一研究者として被災地の支援にどう向き合ってきたかという話と、それから学校図書館の被害の状況は、実はまだ悉皆調査が全くできておらず、これから長期的に解明していかなければいけないことがたくさんあると思っております、その調査のことなども交えてお話をさせていただこうと思っております。

今回スライドの表紙にさせていただいたのは、去年の4月でしょうか、宮城県の仙台から南に行った所に大河原町という町がありまして、その河川敷に「一目千本桜」と呼ばれる非常に素晴らしい桜並木がありまして、去年支援で入らせていただいた宮城県名取市の図書館の職員の方が、車で連れていってくださいました。そうしましたら桜祭りが復活してしまっていて、恐らくその一年前は桜がいつ咲いたかも分からないというような状況だったと思う、お祭りが復活していて嬉しかった記憶がございます。それを表紙にさせていただきました。それではスライドで説明しながら進めさせていただきます。

1 震災当日のこと

私自身は、震災の当日は所属している日本図書館情報学会の、論文誌の編集会議が東京の神田の神保町でありまして、私はそこに行く途中で、和菓子を買おうと思って店に並んでいたときに被災しました。あまりに揺れが激しくて、外に出ようとしたところ、隣のビルの外壁が落ちたり、ガチャガチャガチャンとガラスが道に散らばる音が聞こえました。お店の方から「ここは何年か前に耐震補強しましたので中にいた方が安全です」と言われて、何人かのお客さんと一緒に中にいて揺れが収まるまで待っていたのですが、そのときにまず尋常ならぬ非常に大きな地震だと思いました。

その後揺れがおさまったので、私は神保町の古書店街を歩いて会議場所まで行きましたが、やはり古い建物などは被害が大きく、揺れが収まったと言ってもただならない雰囲気、道端に人がたくさんあふれ出てきていました。そのときにみんながどういう顔をして

いたかという、宮澤賢治の『注文の多い料理店』の最後のところで、「顔が紙のように真っ白になって戻らなかった」とある、ああいう顔をしていると思ったのです。多分自分もそうだったのでしょうが、ちょっと固まってしまったような、そういう表情をしていたのがとても印象的でした。

また、略歴のところにも書かせていただいたのですが、私は大学を出て最初に三省堂書店という、まさに神保町の書店に就職しました。神田村と呼ばれるような、本屋さんとか問屋さんがたくさんある所で、よく「古書店は天井までびっしり本が詰まっているから、地震があっても安全だ、本がつかえ棒になっていて落ちないのだ」と聞いていましたが、全く嘘で、ほとんど全ての通路が古書の山になっていて、中には血を流してその山をかき分けて出てくる人もいました。なぜか一軒だけ全く1冊も落ちていない本屋さんがありました。他の本屋さんでは外からガラス越しに書架が倒れているのが見えたりしました。

私たちはどうにか余震の中で会議を終えたのですが、その後都心からの帰宅難民となってしまい、会議室で一夜を明かして、翌日に自分の自宅ではなく、母が一人住まいをしている千葉県の実家に様子を見に帰りました。玉川大学の隣の研究室の先生からは「河西先生の部屋は壁に取り付けた書架が全部倒れてドアが開かない、だから来ても何もできないよ」と言われ、さらに東京の方は御存じだと思うのですが、計画停電のため電車も動かないということがあって、通勤自粛勧告などもあり、一週間くらいは出勤もできないような状況でした。

2-1 被災地の子どもたちに届けたい本@ウィキ¹ー立ち上げ

その中で、3日目に辛うじてインターネットにつながったので、自分に今できそうなことは何か、ということでインターネット上にページ「被災地の子どもたちに届けたい本@ウィキ」を開設しました。

そのときに考えたのは、まず一つは、今インターネット上の情報通信だけでできそうな支援をみんなでできないかということでした。このウィキというのは、ウィキペディアという百科事典—いろいろな人が書き込みをして作るものです—もその一種で、無料でホームページを作ることができて、その上でお互いにいろいろなことを書き込んだり、共同作業ができるようになっているものです。

取りあえず子どもたちに本を送りたいという人がたくさんいたのですが、ライフラインなどの修復が優先で、すぐに本を送るのは無理ですので、今インターネット上でできることは何かということで、ブックリストを作ることにしました。「どういう本を子どもたちに届けたいか、あなたが薦めたい本を書き込んでください」ということをネット上でお願いすることを開始したのです。日本だけではなくて、海外、特にアメリカ在住の日本人のお母さんたちが、非常に興味を持って、「ニュースで映像を見るといたたまれないので何かしたいと思っていた、本の推薦を書かせてください」ということで参加していただきました。

¹ <http://www45.atwiki.jp/slls/pages/1.html>

ここ一年はあまり更新もしていなくて申し訳ないのですが、リストについてはここ²からダウンロードできます。私たちは本を贈る活動もしたのですが、必要な方がそのブックリスト自体を使えるようにということで、ブックリストのデータもインターネット上で公開しました。

本を贈る支援をしたときは、私の勤務している玉川大学の附属高校で、情報科というコンピュータを活用する科目があるのですが、その授業を受けている生徒たちにラベルのデザインをしてもらいました。蔵書票みたいな形で貼るものですが、その本がどういう意図で送られたのかが分かるように、いろいろなメッセージを書いて送ってもらいました。

2-2 被災地の子どもたちに届けたい本@ウィキー本を選ぶ（2011年3月～）

このようにしてブックリスト作りを始めたのですが、最終的に60冊分ほどの推薦文付きのリストが出来まして、その一人一人の推薦文を読むと、それ自体がお見舞いメッセージになっていました。「なぜ今私は子どもたちにこういう本を読んでほしいかと思うのか」、そのメッセージもとても貴重な内容でしたので、実名を出してくださっている方は実名で載せています。中にはいまだにお会いしていないし、本名も知らないような方からも含まれています。

これらを最終的に分類すると、3つの種類に分けられました。一つは心を休めてほしいということで、やさしい気持ちになれるような静かな内容の本。それから二つ目は楽しく元気に、どんなときでも子どもたちというのは絵本を見て楽しい気持ちになりたい、笑いたいというような欲求があるので、そういうときに読んでほしいという本。三つ目は、津波とか地震に直接触れている本、科学や防災に関する本です。これは科学読み物の研究と実践を長年されている方が書き込んでくださったのですが、「子どもたちにはどこかのタイミングで必ず正しい知識を得たいと思うときがあるので、そういうものを伝えたい」ということであえて推薦していただきました。このジャンルの本は特に取扱注意として、「子どもたちに見せても大丈夫かどうか確認できる大人がいる状況で紹介してください」、という注意書きを付けて掲載しました。

2-3 被災地の子どもたちに届けたい本@ウィキー本を送る（2011年5月～7月）

私たちの活動では、一部本を送る支援を行ったのですが、これは震災後の5月から7月くらいの短期間でした。私たちの作ったブックリストの本を欲しいという意味が明確な所に送るということにして、そのために募金、あるいは先ほどお話ししたラベルとかしおりの作成などを行いました。

このときに気を付けたのは、一つは相手が欲しい物を送るということです。リストを作ったというのはそういう意味でして、何でもかんでも送るのではなくて、欲しい物についてリクエストを出していただくことにしました。あとは新しい本を送ることで、家にある

² <http://www45.atwiki.jp/slls/pages/39.html>

古い本を送りたいという人も多かったのですが、今本を送るのは過渡的な支援で、例えば学校に送っても学校が移動してしまうこともあるし、その後学校や図書館がきちんと復旧すれば、送った本は最後は一人一人の子どもたちに渡るかもしれませんが。そのときに最初から古い本が更に人の手に渡ってボロボロになっているというのは良くないので、新しい本を買って送る、ということで、募金をしました。

2-4 被災地の子どもたちに届けたい本@ウィキ活動支援（2011年11月～2012年2月）

その年の秋に宮城県の名取市という所で支援活動を行い、11月に「図書館絆まつり」を行ったとき、実際にそのブックリストに掲載されている本を展示して手に取っていただき、抽選で希望者に差し上げました。

その他に、私の専門分野になりますが、名取市はもともと専任司書が各校に配置されていたのでその勉強会の講師をすとか、日本アニメーション協会の黒木秀子理事長にも御協力いただき、何度か現地に行っていたいで、現地の子どものアニメーションの体験講座とか、図書館関係の方への講習というようなことを行いました。

以上のようなことがウィキを通じて実現した支援の一つの流れです。

3-1 学校図書館調査—背景

もう一つ並行して、研究者として学校図書館調査をしたい、ということがありました。私は学校図書館をフィールドとして研究をしているのですが、先ほどのウィキの活動をするようになった原点のひとつに、新潟の中越地震のときに学校図書館の復旧ボランティアをしたことがありまして、そのとき既存の団体が全く動かず、支援活動が何もなかったことに非常に憤りを感じた、という経験がありました。

当時、ある学校図書館関係者のメーリングリスト上で、実際に被災した地域の方から、こういうことで困っているというのを聞いて、現地に入って支援活動をしました。例えば田麦山小学校—その後廃校になってしまった小学校ですが—そこが避難所として使われていて、図書室は医務室になっていたのですが、これを復旧させる作業が必要だということで、バス一台に大学生や図書館関係の人50人くらいが乗り込んで行って、一日かけて本棚とかそういうものを元に戻したり、あるいは図書のデータ入力をしたりということをしました。

しかし、そのときに、不可解なことにバッシングを受けました。公的な機関がやればいいことを、どうして勝手にしゃしゃり出てやっているんだ、というようなことを言われ、助けてくださいという声を上げた人も、どうして声を上げるんだ、というようなことを言われたということで、何かおかしいのではないかと、非常な違和感と憤りを感じました。それで今回は、必ず何かをきちんとしなければというような意識がありました。

今回はこれだけの災害ですので、いろいろな方や、既存の組織なども支援に動かれているのですが、やはり学校図書館については調査も支援も低調なのです。

まず、私は先ほどのウィキの活動で縁のできた所に入って追跡調査みたいなことができればと思ったのですが、結局それはできなかったのです。なぜかという、被災直後の過渡期ですから、初めの避難先からまた別のところへ移ってしまったりするのです。また、最初に本をお送りしたのが福島県の学校だったのですが、福島県は通常 3 月に行う先生の異動が、震災のため半年遅れて 8 月になったことで、当初連絡を取っていた先生と連絡が取れなくなったり、あるいは町役場自体が移転してしまったり、連絡が取れなくなったりと、新潟中越地震のときも支援していた学校が廃校になるということもありましたが、過渡期の支援先を追跡するというのは難しいなと実感しました。

また、一年前に国立国会図書館が刊行した『東日本大震災と図書館』³という調査報告書の報告会⁴で出た話なのですが、この調査報告書には学校図書館のことは全く入っていないのです。なぜかという、報告書の編集のご担当の方がおっしゃっていたのですけれど、「学校図書館のことを調べさせてください」と言って自治体に入っていくと、「何で図書館なの、もっと重要なことが他にいくらでもあるでしょ」と言われてしまうのだそうです。震災直後はもちろんそうですけれども、1年たっても2年たっても、やはりその扱われ方というのは変わらないのです。新潟中越地震のときにも思いましたが、要するに学校図書館というものが、学校の中では重要な施設とか機能とは認識してもらえていないということです。これが、学校図書館調査が難しいという背景で、恐ろしいというか、このまま放っておいてはいけないと思ったきっかけの一つです。

3-2 学校図書館調査—宮城県名取市

話が多少前後しますが、福島県、そして宮城県の岩沼市というところに一どちらも津波の被害を受けているのですが一支援として、本の一部を送らせていただきました。それで、被災地に入って調査をしたいと伝えましたところ、岩沼市の方から、お隣の名取市は長年学校図書館に専任の司書さんを置いているので、公立の図書館に行けば情報が入りますよ、と御紹介いただいて名取市に行ったのです。名取市というのは仙台のすぐ南です。仙台空港が浸水した映像を覚えていらっしゃると思うのですが、あれは実は仙台市ではなくて、名取市です。

名取市全域を地図で見ていただくと、仙台空港がここに 있습니다。それから閑上（ゆりあげ）という地名が有名になりましたが、閑上はこのあたりです。津波の被害があったこのあたりが大体海岸から 2 キロくらい、図書館があるのがこのあたりで多分5キロくらいです。当時は全然情報が入らなくて、この 2 キロの所まで津波が来ているというのは全く分からなかったようで、だから逃げなかったわけです。もう少し津波が大きければ、もしかしたら図書館も被害にあっていたかもしれないということで、聞いていてもぞっとするような話でした。この閑上の地域では、小学校中学校が一校ずつ津波の被害を受けていて、

³ 『東日本大震災と図書館』国立国会図書館関西館図書館協力課, 2012.3

⁴ 平成 24 年 3 月 29 日に調査関係者を対象として国立国会図書館で開催された報告会。

今仮の校舎がやっとできていますが、そのような所で調査をさせていただくことになりました。

当初 2011 年の 7 月に行ったときには、図書館はほとんど全壊に近い半壊状態で、いろいろな所にひびが入っているので、危なくて利用者を入れられない状態でした。図書館の方は一応避難口を開けて、いつでも逃げられるようにしながら倒壊しそうな 1 階で執務をされていました。2 階の図書については、交流のあった北海道の石狩市の図書館の方が 5 月にボランティアで来て、段ボール詰めをして全部 1 階に降ろしてくれたということでした。

7 月に私が、まさにその 1 階で作業していらっしゃるところに伺ったら、ものすごく迷惑そうな様子をされまして、学校図書館の支援のお手伝いをしたいと言ったところ、もう頼むことはないと言われてしまいました。しかし私が学校図書館を専門にしている研究者だとお話をしましたら、「そちらの方がニーズがある、今年はまだ司書さんの研修などはできないので、研修の講師に来てくれるのだったら」、ということで、思わぬところで受け入れていただきました。そこから何度か伺って、研修を担当させていただいたり、図書館のお祭りに参加したりと、少しずつ信頼関係ができていきました。その中で、他になかなか調査ができないので、とお願いをしてアンケートに答えていただきました。

本当は例えば仙台の周辺や宮城県内など、幅広く調査したかったのですが、今は地方分権の影響とかで、都道府県はほとんど市町村の情報が吸い上げられないとのこと。もし悉皆調査をするのであれば、各市町村にそれぞれアンケートを送らないとできません。国立国会図書館の調査報告書でもそうでしたが、学校図書館の状況は結局市町村の状況なので県には直接の情報がないわけです。ということでやはり同じ問題にぶち当たり、結局は一番交流のあった名取市の調査をさせていただくことになりました。

3-3 学校図書館調査—小学校の被害状況と課題

名取市には小学校、中学校が合わせて 15 校あるのですが、その全校に司書さんがいらっしゃるので、質問紙調査として司書さんにお話を聞き、分析をしました。

被害状況はどうかといいますと、例えば津波で流出してしまったような場合は何冊汚損したとか何冊なくなったとかいうのは分からないわけです。ですので、分かる範囲で部分的ではありますが、比較的多かったのは本の落下、それから書架の倒壊です。それ以外の建物の被害というのは、実はほとんどありませんでした。後からお聞きすると宮城県は、以前からかなり長期的に学校の耐震工事をして備えていたので、建物自体の被害というのは最小に留められたということがあったようです。これは一つの成果だったのですが、津波さえなければかなり被害は小さく抑えられたのではないかということは調査結果からも出てきました。

また、私はこのような大きな被害があったときに、外部へのニーズとしてどのようなものがあるか、ということを知りたかったのでお聞きしました。しかし、名取市は全校に司書さんがおいでになったので、外部へのニーズはほとんどなかったという結果が多かった

です。一方、津波被害があった学校などでは外部へのニーズはあっても、どうしようもなく、他の部分のケアが優先になってしまったので、何もできなくて終わってしまった、というようなことをおっしゃる方もいらっしゃいました。

最後に、平常時に何ができるかというようなこともお聞きしました。その結果、図書館の場合は教室とは事情が違うのだと思いました。不特定多数の子どもが図書室に来ている休み時間などに大地震が起こった場合、人数確認をしたり点呼を取ったりできません。今回は3月でしたし、卒業式の後の謝恩会の時間だったので子どもたちは全員既に学校から出ていたけれども、もし図書館を使っている休み時間とか放課後であれば自分は どうしたらいいか分からなかった、というようなお話もあり、学校の中でも図書館という、特殊な使われ方をしている施設ならではの回答がありました。

そして、必要なこととしては書架の固定が挙げられました。また、本の落下を防ぐようなことができれば、その後のかなり労力を減らすことができます。本が落ちると大変です。国立国会図書館も大変な状況になりました⁵し、さらに複数回の余震がかなり図書館員の方々の気力と体力を奪ってしまった、一回きちんと元に戻したらまた余震でまた倒れてまた落ちてしまったので、というようなことを、かなり聞きました。日本は震災国ですし、学校も どうしたらいいかということ をきちんと考えていかなければならないと思います。

また、自由記述で問題点や課題を書いていただいたのですが、小学校の場合目立っているのは、書架が比較的低いので、頭の上から本が降ってくるというようなこともなく、倒壊もなかったので被害が少なかったという現実と、先ほどの休み時間など子どもがたくさんいる時間帯に地震が起きたらどうするかという課題です。

それから、これは松岡先生もおっしゃっていたので、ほっとしたのですが、御厚意ではあっても、送られてくる本の処理は大変だということです。子どもに本を送りたいという気持ちは、とても有り難いです。子どもにとって本が大事だということを考えている人がそれだけ多いというのは素晴らしいと思うのですが、実際に聞いてみると届いたけれども実際には使えない本が300箱くらいあって、仕方がないから津波被害で使われなくなった校舎にそのまま放置してあるとか、あとは、あまりにも汚くてかえって涙が出るような、精神的な2次被害を受けてしまうような本が送られて来ることもあるということです。阪神淡路大震災、新潟中越地震といろいろ経験しているのに、まだ同じようなことが起きているということが私はとても気になっています。

それからもう一つ、なぜ本を送ろうというときに専門家である図書館に相談して送るか、あるいは松岡先生とかJBBYなど専門のところに集約してという発想がないのだろうか、とても残念です。これは図書館というものの認知がまだ進んでないのかなど、図書館の研究者としては反省すべき点でもあります。あるNPOの方は、出版社からたくさん本をもらったので、1トントラックにいっぱいその本を積んで小学校に行ったら、校長先生にもものすごく怒られたと言っていました。それはそうでしょう、それぞれの学校に1トン

⁵ 東京本館の蔵書約180万冊が落下した。(www.ndl.go.jp/jp/aboutus/pdf/geppo120607_p4-10.pdf)

もの本をまとめてもらってもどうしようもないです。本が子どもに届くまでの間に、何が必要なのか、というところまで考えられている人というのは、まだとても少ないのですが、これは今後考えていかなければいけないことではないか、と思いました。

3-4 学校図書館調査—中学校の被害状況と課題、津波被災校について

中学校では、いろいろな地震を経験して、地震に耐える書架はどういうものなのかという検証はきちんとされているのか、という疑問が、司書の方から挙げられていました。

また今後の課題として、2011年度は震災直後で寄付や支援もたくさん寄せられましたが、失われてしまった本の補充など、長期的な対応についてはもっと費用がかかるため、これからどうしたらいいかというようなことが挙げられました。

ここまでのまとめになります。今回の震災では建造物、図書館施設の被害は少なかったのですが、一方では甚大な被害に遭ったときにそれをどうするかという備えが、学校図書館ではまだまだ十分ではないということが明らかになりました。宮城県は防災についてかなり対策をとっていたけれども、その上でもまだいろいろな被害があった、ということです。

その後、昨年4月に追加で津波被害に遭った学校の司書の方々に重点的にインタビューをさせていただきました。その際に、通常、学校図書館は1階の、誰でも通る昇降口の横などにあるのが理想的と言われるのですが、今回は図書館が2階とか3階にあって、水に浸からなかったのかえって良かったというような話を聞きました。これからは浸水とか洪水とか、そのような危険も考えると、必ずしも1階が良いとは言えず、地形とか立地によることもある、と考えさせられました。

また、名取市には、被災直後に北海道石狩市などから、いわゆる広域支援を受けることができました。今後のことを考えたときに、やはり日頃から自分の地域とは違う所とつながっていることがとても大事なのではないだろうか—同じ地域だと一緒に被害を受けてしまいますので—、日ごろからネットワーク化のようなことを考えて、学校図書館でも、個人ではなく広域での地域間のつながりによる相互支援を考えていかなければいけないのではないだろうか、これはどちらかという、学校の枠を超えて自治体対自治体のつながりということになるのかもしれないけれども、そのようなことも考えました。

最後に

実は、今日のこういう会を設けていただいたらどうかというお話を、国際子ども図書館にさせていただいたのは私です。当時支援の相談場所になっていたメーリングリスト上で有志間で相談していた内容を、そのリストに参加していた国際子ども図書館のスタッフの方が取り上げてくださり、それが企画の元になったと聞いております。子どもに本を送ることの問題とか課題などということが、大きな問題意識としてあったので、それを共有していくことが重要なのではないか、ということをお話して企画をしていただきました。素

晴らしい機会を実現していただいたことについて、本当にお礼を申し上げたいと思います。この後まだ時間が多少残されているようですので、松岡先生、それから村山先生のお話とあわせて未来の為に何ができるのかというところを話し合わせていただけたらいいなと思っております。ありがとうございました。